

百年前の遠足

——『跡見花蹊日記』1909年10月16日——

『跡見学園——百三十年の伝統と創造』（2005）pp.41-43によると、跡見女学校は明治39年（1906）以降毎年のように、修学旅行と遠足を行っている。ここでは『跡見花蹊日記』（2005）から明治42年（1909）秋の群馬県太田への遠足の記事を紹介し、もって往時を彷彿してみたい。当時、跡見女学校は小石川区柳町（現文京区小石川 1-23-16）にあり、校長跡見花蹊（1840-1926）は70歳であった。なお、目的地太田は、中世の新田荘の一部である。

十月十六日 己酉 土曜 晴

太田遠足会。生徒全部。朝五時半、塾生一同を拉^{らっ}して、終点⁽¹⁾より電車にて神保町乗替、直に両国停車場⁽²⁾に行。六時半、姫宮三殿下⁽³⁾成らせられる。鉄道局にては宮様成らせられに（ママ）付、特別臨時汽車仕立ると云。一時間遅く成る。然し停車はなく候故、格別遅くもならぬと云。八時半発車す。天気は実に申分なく、それに始めての処なれは見るもの珍^{しく}敷、十一時太田に着。わか校友父兄等、及新田寺大光院⁽⁴⁾より使僧、及信徒惣代一勢迎人列を立て、大光院へ御着。実に盛況也。大僧正、緋の衣にて御迎ひ申上、御座へ成らせられる。僧正の案内にて、本堂御拝、宝物拝観。十二時昼餐済て、徒歩して金山⁽⁵⁾に登る。実に急なる山道にて、途中にて登れぬもの五、六人あり。十二丁⁽⁶⁾の山道と云。漸^{ようやく}登り尽して、新田神社⁽⁷⁾に参拝す。新田左中将旗印、宝物拝見す。此時、校友中村多佳、相川信、若旅島、丸岡ます、新島里子⁽⁸⁾より、菓子箱入三百五十箇、林檎七百箇、一同へ饗せられる。茶のたき出し、歓待盛也。山上四方之眺望、日光山、赤城の処々、下に渡良瀬川、桐生、繁花なる町々、実にパノラマの如し。黄田万頃、秋色風光限りなし。山上之写真撮影二度、一同山を下りて大光院に休足、暫時にして四時半汽車に乗す。送り之人々又山をなす。誰一人の病人もなく、一同無事、八時両国に着。直に帰校、先々安心。

注

- (1) 今日の白山通りを南北に走っていた路面電車（後の都電）白山線の終点指ヶ谷。文京区役所前を経て神保町に通じていた。神保町からは東西に走る両国橋線に乗換え、両国駅に至った。
- (2) 両国停車場 両国駅。当時総武鉄道（現 JR 東日本総武本線）の始発駅で、房総方面への玄関であった。太田に行く汽車は、亀戸から今日の東武鉄道亀戸線に入り、曳舟駅で伊勢崎線に入り、太田に至った。
- (3) 姫宮三殿下 閑院宮家の恭子（1896-1992）・茂子（1897-1991）・季子（1898-1914）の三姉妹。母智恵子（1872-1947）妃の強い希望により、跡見女学校に小学部から学んだ。
- (4) 新田寺大光院 義重山大光院新田寺。徳川家康（1542-1616）が、先祖と仰ぐ清和源氏新田氏初代新田義重（1135-1202）を供養するために、慶長18年（1613）に建てた寺。山号は義重の諱、院号はその法諱大光院殿、寺号はその氏から取ったもの。
- (5) 金山 太田市北に位置する金山丘陵には中世金山城があった。新田義貞（1301-1338）の曾孫新田（岩松）家純（1409-1494）が建てたもので、1469完成。
- (6) 十二丁 一丁は約109m、12丁は約1,308m。
- (7) 新田神社 金山城の実城（本丸）跡に建てられた神社。正4位下、左近衛中将、新田義貞を祭る。
- (8) ここに記される五名の女性がかつての跡見女学校の卒業生たちである。中村多佳子は1905卒、相川信子・若旅島子は未詳、丸岡満寿1913卒、新島里子1905卒（いずれも『汲泉』による）。

遠足の行先を太田にしたのは、当時新田義貞の子孫が二人、跡見にいたことと関係があろう。新田純孝（1851-1930）の娘たちで、姉の寿子（1892-1948）は前々年に卒業してから母校で書道を教えていたようだが、のち跡見花蹊の甥で、画家かつ跡見女学校事務長、跡見泰（1884-1953）に嫁いだ。妹の千登世（1894-1915）はこの年3年生に在学中で、1912に首席で卒業したが、早逝した。

一女学校の遠足とはいえ、皇族の姫君（女王殿下）が3人含まれているのだから、迎えた地元の苦勞が察せられる。他方、秋晴れの空の下、差入れの菓子やりんごを頬ばった生徒たちは、さぞや心浮き浮きとはしゃいだことであろう。

嶋田英誠

（跡見学園女子大学客員教授）